

氏名	大嶋かず路
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博音第156号
学位授与年月日	平成21年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉カール・ホルタイの音楽劇《老いた将軍》 ーその実像と歴史的意味についてー

論文等審査委員

(論文審査主査)	東京芸術大学	教授	(音楽学部)	檜山哲彦
(論文審査副査)	〃	〃	( 〃 )	中嶋敬彦
( 〃 )	〃	〃	( 〃 )	成田英明
( 〃 )	〃	准教授	( 〃 )	杉本和寛
( 〃 )	〃	〃	( 〃 )	大角欣矢

(論文内容の要旨)

本論文はカール・ホルタイKarl von Holtei (1798-1880) の音楽劇《老いた将軍Der alte Feldherr》について、その実像を明らかにし、この作品の果たした歴史的意味を明確化することを目的とする。音楽劇《老いた将軍》はポーランドの独立運動の英雄タデウシュ・コシチウシュコ (1746-1817) を主人公とする1幕の音楽劇である。この音楽劇は1825年にベルリンにおいて初演され、好評を博した。この作品には1825年初演版、1830年のポーランド独立蜂起勃発を機に改作された1831年版、1840年の英国初演版と3つの版が存在する。《老いた将軍》は現在ほとんど演奏されることはなく、研究の対象外とされている。しかし、同作品に関する当時の資料を読み解くと、1830年代に書かれた主要なポーランド関連作品に《老いた将軍》からの影響が顕著に見られることが明らかとなった。従って、同作品の内容及び他の作品との影響関係について確かなものとするのは、従来の研究上の欠如点を補うのみならず、今後のポーランド関連作品研究に貢献することになると考えられる。

本論文は4章及び終章より構成される。第1章では《老いた将軍》の誕生に至るまでのホルタイとポーランドの関係について概観した上で、3つの版の成立の経緯について詳述した。さらにリブレットを用いて削除点、加筆点、劇中歌の相違点について比較考察し、各版の実像を明らかにした。

第2章では、18世紀末から19世紀のドイツ文化史における《老いた将軍》の位置づけを行った。ポーランド3国分割開始以降、ポーランド問題は度々文学作品等の中で記されてきたが、それらは一般市民に向けて問題の所在を啓発するものではなかった。ホルタイが市民を聴衆対象とする音楽劇の題材にコシチウシュコを選んだことで、ポーランド問題への社会的関心が高まった。本章では《老いた将軍》を文学史、音楽史の文脈に置き、11月蜂起勃発以前に誕生したポーランドをテーマとした作品との関連性について考察し、3国分割から11月蜂起に至る創作活動の中で「ポーランド問題の大衆化」を図った同作品の位置づけを確かなものとした。また、《老いた将軍》が受けた初演当時の評価について新聞等に掲載された批評文を用いて考察し、様々な評価の中に反映される各地の対ポーランド感情について明らかにした。

第3章では、《老いた将軍》の改作の意図を明らかにすることを目的に、ドイツにおけるポーランド熱とホルタイの関係について考察した。ポーランド熱は11月蜂起勃発を機にドイツにおいてポーランドに対する関心が高まった現象である。当時のドイツではポーランドをテーマとした詩(ポーレンリーダー)が多く書かれ、ポーランド人亡命者は英雄として崇められた。ホルタイもまた《老いた将軍》の改作を

行い、ポーレンリーダー『最後のポーランド人』を発表した。『最後のポーランド人』において、ホルタイは結束を欠き異国を迷走するポーランド人亡命者や、ポーランドを神格化するドイツ人達に対して否定的な見解を表明している。世の風潮と逆行するこうしたホルタイの見解は、1831年版《老いた將軍》にも反映されている。本章ではポーランド熱時代に流行した軍歌の歌詞やニコラウス・レーナウのポーレンリーダーを例としてホルタイの作品との内容的な比較分析を行い、英雄の不死を歌った《老いた將軍》1831年版に込めたホルタイの意図について考察した。

第4章では、《老いた將軍》がポーランド熱下のドイツにおいていかなる作品として理解されていたのか、その劇中歌の流行の実態を示すことで明確化した。《老いた將軍》の劇中歌の演奏史を概観すると、ポーランドの蜂起歌と共に演奏されたこと、とりわけ1830年代に行われたポーランド人亡命者歓迎行事において、両者の並存が恰も不可欠であるかのように演奏されたという事実がある。ポーランド熱時代の《老いた將軍》の演奏形態を示し、ホルタイの意思とは無関係に演奏され、その姿を変容させていった同音楽劇の様相を明らかにした。

終章では第1に同時代と後世の作品にみられる《老いた將軍》の影響について具体例を提示し、時代と国境を越え、ナショナリズムの昂揚に伴い活発化した社会運動の中で影響力を發揮した《老いた將軍》の歴史的な役割について述べた。第2に、本論文全体を見通した上で、19世紀初頭から中葉のヨーロッパ文化史において音楽劇《老いた將軍》が果たした役割とその存在意味について筆者の見解を述べた。

#### (総合審査結果の要旨)

カール・ホルタイの音楽劇『老いた將軍』を中心に据える本論文は、「その実像と歴史的意味について」という副題から知られるように、一方において、現在ほとんど上演される機会もなく、学術的な研究対象となってもこず、歴史に埋もれている作品を発掘して、その内容を解明し、時代状況とのかかわりでなされた改作、出版、上演の過程を綿密に明らかにしつつ、また一方において、改作を促した同時代の歴史状況のなかでの当該作品の位置づけ、意味づけをおこない、さらには、後代に与えた影響をも探ろうとする、広い奥行と長い射程とをもった論考である。

修士課程このかたの研究対象としてきた、1830年代のドイツにおける「ポーランド熱」という時代状況を、本論文においては、文学と音楽を結ぶ音楽劇である『老いた將軍』という光源から重層的に照らし出すよう論述が展開されてゆく。前半では、本来は娯楽向け「歌謡つき民衆劇」であった作品が、ポーランドの対ロシア蜂起という同時代の大事件をきっかけとして、アクチュアルで愛国的な意味をもつものへと改作される経緯が詳述され、ポーランドをテーマとするドイツ文学史・音楽史における位置づけがなされる。後半では、視野が広げられ、ポーランド亡命者の支援活動などの社会状況とあいまって高まる民主化運動のなかで、『老いた將軍』の劇中歌が革命志向の歌として広く社会的な意味をもつにいたる状況が描述され、終章において、当該作品の歴史的な位置と意味とが、影響関係にあると思われる音楽作品や周辺の音楽作品を援用しながら、結論付けられる。

そのさい、たとえば、民衆に広まってゆく劇中歌が、他の楽曲と比較されるにとどまらず、その曲じたいの音楽的な特質において詳細に検討されていたならば、『老いた將軍』という音楽劇の同時代への受容のされかたに、別の角度から光を当てることも可能になったであろう。

こうした音楽分析面での物足りなさはあるものの、作品の内と外とを同時に見ようとする構成、丹念な一次資料の収集にもとづく厚みをもった論述には、十分な説得力が備わっている。音楽と文学とを橋渡しする音楽劇というジャンルへの新たな視野を開きつつ、音楽と歌や文学が歴史を動かす原動力の役割を果たす状況を丁寧に論述したことは、音楽史、文学史にとどまらず、歴史学に対する貢献とみなすこともできる。テーマの設定、資料収集と資料操作、独創性、今後の研究への刺激、いずれの点においても、学位授与にふさわしい良質の論文である。